



### 「川」というモノサシを考えてみる

例えば川。川の水が極端に濁り、あるいは水量が少なく(変動が激しく)、ミネラル分が豊富でない川は人にとってはもちろん、そこに棲む生きものにとっても不幸です。そしてその影響は川の生きものにつながる人も含めた多くの生きもの、つまりは流域の生態系にとっても長く深いダメージを与えます。

この生きものには当然人も含まれています。つまり人の暮らしは「豊かできれいな水源」を理想としており、水がないと成り立たない農業を含めた産業にとっても痛手です。

誰も川をわざわざ劣化させようとしてはいませんが、結果として高知県の川は少なくとも50年前に比べたら、豊かとは言えなくなっています。

この原因は実に多様ですので、「ここをこう変えたらよい」というような単純な構造ではありません。しかし人の行為がその劣化の引き金を引いてしまったことは間違いないですね。

なぜこんなことになったのか。

これは人も生態系の一部であることをすっかり忘れてしまい、自然を人の都合で分断したからと私は考えています。

地域で特に高齢者の方々とモノサシを作るワークショップを行い、川について聞くと、かつて彼らが

若者であったころはどんな生きものがいて、それをどうやって食べていたかという話に花が咲きます。そして、今の川がなぜこうなってしまったのか?その原因についても彼らにはわかっていることが多いようです。

そこで「川」をモノサシとして仮定した場合、

- ・どんな川が理想的なのか。
- ・その理想的な川を維持するためには何をすればいいのか。

つまり、川の姿や状況がその地域の何かのモノサシになると考えられます。

ただし難しいのはその「よし」とされる姿が果たして本当に良い姿なのか?これは意見が分かれるでしょう。

水質、水量、生きもの指標、季節変動、あるいは人と川の付き合い方……いくらでも出てきます。

この意見交換こそがモノサシを作る成果の一つかもしれません。

人にとって水は必要不可欠です。高知県においてはほとんどの水が河川から得られています。

地域ごと、あるいは集団や組織ごとに川についてのモノサシができ、川についてもっと多く人が関心を持ち、様々な場面で川について熱く議論するようになれば、もしかしたら高知県の川は甦るかも